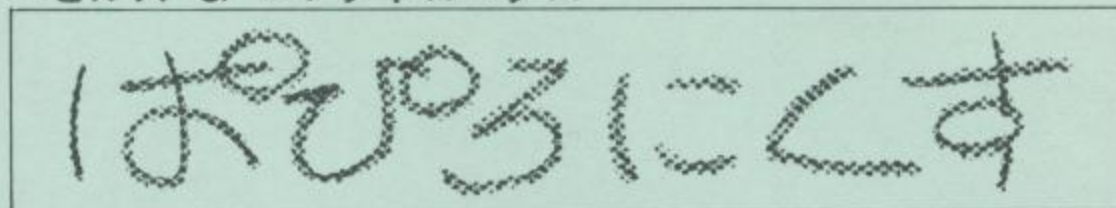


第 13 号



パピルス & エレクトロニクス



大阪工業大学中央図書館

〒535 大阪市旭区大宮5-16-1

06-952-3131

テキサス大学オースチン校 図書館見聞録

大阪工業大学機械工学科助教授 小山 富夫

テキサス州は、アメリカの最南部にあり、西部劇で名高いリオグランデをはさんでメキシコと1,248マイル(2000km)の長い国境線をもっており、ニューメキシコ、オクラホマ、アーカンソー、ルイジアナの各州と接しています。オクラホマとの州境は、これまたジョン・ウエインの西部劇で名高いレッドリバーで区切られています。面積はアラスカ州について第2位で、275,416平方マイルあり、日本のおよそ2倍です。



テキサスの語源はインディアン語のfriends、あるいはallies (同盟者、同類)を意味するtejasから来ており、州の標語はFriendshipです。テキサス州は1510年から約300年間スペイン領(うち数年間はフランス領)であり、その後メキシコ領、独立国を経て、1845年よりアメリカ合衆国の領土となりました。昨年は、テキサス州誕生150周年記念のイベントが各地で繰り広げられました。

テキサス州の人口は、1,500万人で、ヒューストン、ダラス、サンアントニオ等の大都市はよく知られていますが、州都は人口27万人のオースチンであることはあまり知られていません。オースチンは州のほぼ中央に位置し、TI(テキサス・インスツルメンツ)、IBM等の工場がありますが、最大の事業体はテキサス大学オースチン校です。

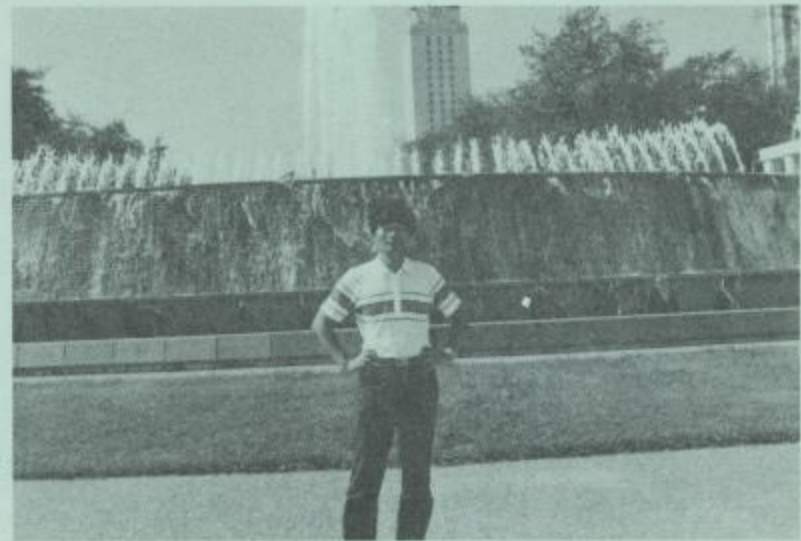
テキサス大学は、州内各地にいくつかの分校をもっていますが、オースチン校(UTA)が中心校です。1985年秋学期の在学生数は、学部生約36,600名、大学院生11,200名、計47,800名でした。これは州立大学としてはオハイオ州立大学について全米第2位の学生数です。また教員数は、講師以上が約2,300名、大学院生のアルバイトを中心とする教育及び研究のアシスタントが約3,600名、職員が9,700名です。筆者は、1985年8月から1986年8月までの1ヶ年間、このテキサス大学オースチン校客員研究員として滞在していました。

『ぱぴろにくす』は、大阪工業大学中央図書館の広報紙ですので、ここでは主として同大学の図書館に関連する事柄について筆者の思いつくままに書いてみます。

テキサス大学オースチン校には中央図書館と学部生用図書館(Under Graduate Library)のほか、各学部図書館、特殊領域の図書館等合わせて17の図書館がキャンパス内にちらばっています。単行本の蔵書数は500万冊以上で、350万件のマイクロフィルム、3,000万頁の原稿、85,000部の地図を有し、数百のデータベースとオンラインでアクセスされています。これは、州立大学の学術図書館としては全米第3位にランク付けされています。また図書館のライブラリアン(司書)といわれる専門家は122名おり、自分の専門領域の事柄には精通しています。内部の設備も非常に立

派で、ほとんどのフロアーにはジュータンが敷かれ、ゆったりとしたソファで昼寝もできます。法学部図書館などはまるで一流ホテルのロビー並です。主要な2つの図書館（中央図書館と学部生図書館）の開館時間は、月～木曜が午前7時から午前2時まで、金曜は午前7時から午後10時、土曜は午前11時から午前0時、日曜は午前11時から午前2時までとなっています。他の学部図書館も通常午後11時までは開館しています。しかも休館日は年間数日で、試験中はオールナイト開館の時もあります。試験中でもない日曜日の真夜中、図書館が勉強する学生で満員の盛況であることなど、工大生にはおそらく信じられないことだと思います。

なぜ大学図書館がこのようにほとんど24時間オープンしているかといいますと、それだけ利用者があるからです。すなわちアメリカの大学生はよく勉強する（せざるを得ない状況におかれている）からです、よくいわれるように、アメリカの大学は入り易く出にくいのです。テキサス大学オースチン校の場合、テキサス州住民の高校卒業生のTop Quarter（上位1/4以内のもの）は無条件で、それ以下の者はSATあるいはACTと呼ばれる共通試験で一定レベル以上の点を取っていれば入学できます。しかし、州外の住民あるいは外国人はこれより少し厳しい基準が適用されます。また英語を母国語としない外国人はTOEFL（Test of an English as a Foreign Language）のスコアが550点以上であることが要求されます。さて入学は比較的簡単であります、卒業はちょっと難しいのです。例えば工学部機械工学科では450名入学して卒業できるのは150名程度だといわれています。授業の進度は早く、ほとんど毎回宿題があり、レポートの提出を求められます。通常1 semester（1学期、4ヶ月）の間に1～2回のQuizと呼ばれる中間試験とFinal Exam（最終試験）があり、これらの成績とレポートでGrade（評価）がつけられます。工学部の場合IBM、GE、GM等の有名企業へ入社しようと思えばいい成績をとり、大学院へ進学してMS（Master of Science）、PhD（Doctor of Philosophy）等の学位を取る必要があります。教員も学生も、入学を許可したからには卒業させるべきであるという意識は毛頭ありません。大学の講義についていけない者、勉強しない者はどんどん退学していくのです。



「テキサス大学オースチン校の噴水の前にて」

さて、話を図書館の方に戻します。テキサス大学オースチン校の学生48,000人の内日本人留学生は60人ほどですが、Asian Collectionという図書館には多数の和書の他に約300種類の日本の雑誌、週刊誌等があります。政府刊行物、大学の紀要、中央公論、文芸春秋等の月刊誌、サンデー毎日、週刊朝日等の週刊誌があり、10日遅れですが読売新聞も毎日配達されていますので日本の情報を得るのには事欠きません。この他、中国、韓国等、アジア各国の書籍、雑誌、新聞が集められています。特許を調べたい時はEngineering Libraryへ行けばいいのです。数百万件の米国特許がすべてマイクロフィルムに収められ、フィルムリーダーから簡単にA4サイズのコピーも取れます。文献調査を短時間でしたい場合はデータベースを使います。テーマを見て、どのデータベースを使えばもっともよいか、ベテランの図書館員が教えてくれます。館内の端末機からオンラインでただちに必要な情報が得られます。しかしこれは勿論有料です。1942年5月6日（筆者の誕生日）のNew York Timesを読んでみました。太平洋戦争の真最中だというのに、大学の民主化要求の学生デモのニュース、新しいファッションの話、現在の新聞と変わらないような各種の広告、そして戦争のニュースが一部。戦時色一色の当時の日本の新聞と大きな違いです。よくまあこんな国と戦争を始めたものだなあと思ったものでした。ちなみにNew York Timesは創刊号

から全頁マイクロフィルムに収まっています。

大学の図書館だけがスケールが大きく、設備、機能、サービスが充実している訳ではありません。ちっぽけな町オースチン市立図書館においても、書架の横に子供の遊び場をもうけ、本の他に、音楽テープは勿論、ビデオテープ、レコードから額入りの油絵まで無料で貸出しているのです。日本とアメリカでは図書館に対する考え方に差異があるにしても、我国の文化的社会資本の貧困さをつくづく思い知らされたことでした。

シリーズ『淀川ぶらり散策』

第6話 蕪村と毛馬 その1 郷愁

菜の花や月は東に日は西に (蕪村)

今では、家やマンションが林立する街並となっている毛馬の近辺であるが、昔は淀川の水がのんびりと流れる田園地帯であったという。蕪村は、10代後半までの多感な時代を、こののどかな風景の中で過ごした。

与謝蕪村。本名、谷口蕪村。牽町・落日庵・紫狐庵・夜半翁・夜半亭二世などとも号す。享保元年(1716)に生れる。生地は、大阪天王寺を唱える説もあるが、摂津国東成郡毛馬村とするのが定説である。

橋なくて日暮れんとする春の水

父母を早く亡くしたとも、父と母は生き別れとも伝わり、毛馬時代の蕪村は、あまり幸多きものではなかったらしい。毛馬を出てよりは、終生故郷に帰ることがなかった蕪村であるが、母の出生の地、丹波の与謝を名にとるなど、忘郷の念は人一倍強かったようである。長柄橋を詠んだこの歌も、洪水の後、何事もなかったかのように、ゆったりと流れる川面に、春の陽光がさんさんと照り返るさまを描く中、日暮れていく情景に、つらさ切なさを歌い込めている。荒れる淀川、ひしと母にすぎた幼き日のぬくもり、野辺で遊んだ童達。茫漠とした郷愁の念と追憶の情が伝わってくる。

我に師なし

と晩年に洩らしたという蕪村。「一切を吸収し、そして放棄した」と人は語るが、完全に放棄するのではなく、大胆とも絶妙とも言える省略によって造られた空白、空間の中に生かされ、昇華されていると言えよう。この大らかで、のどかな空間・拡がり、蕪村独特のファンタジーを宿す、詩的夢想の世界の形成に大きな役割を果たしている。そして、そのみずみずしいまでの感性と大らかさ、のどかさ、大自然の有するそれである。蕪村にとって経験し、吸収したものの一切は、昂められ昇華され、やがて自然の中につつま込まれ、溶け込んでいくのであった。それは、幼き日のあたたかき母の懐への思いであり、そこへの回帰の姿といえよう。毛馬時代の自然・生活・思いが蕪村の作風に大きな影響を与えたというのは、過言であろうか。あまりにも蕪村は、郷愁を漂わせる詩人である。

林春隆氏は「我が大阪の東郊毛馬の在所で生れた谷口蕪村は、どこまでも土の香に親まれる春雪の溶け易さが、ひとしく彼れの生涯にただようのであった」と評す。(柏書房：町人文化百科論集第4巻浪花のなりわい「蕪村と食味」)。

蕪村は、画・俳の修業のため17、8才の頃、毛馬を離れ、江戸へ旅立つ。

草霞み水に声なき日ぐれ哉



毛馬にある蕪村生誕地の碑

図書館活用の手引き No.12 遊びの雑誌

これから暖かくなるのかなと思いきや、どこかうすら寒いこの季節。何かしら大切な事があると雨が降ったり、春一番が吹き荒れたり。そうかと思うと、初夏を彷彿とさせるような陽炎が立ちこめたり。そんな移ろいやすい季節とはうらはらに、街では春の最新作と題し、新鮮で暖さを心象したものが随所に見かけられます。それに便乗するわけではありませんが、この時世に、追いつかずとも取り残されないように、“遊びの雑誌”と題しまして、現在、中央図書館で利用されている“雑誌”について紹介したいと思います。

一口に雑誌と言いましても、図書館の認識のない方には堅苦しいものを想像してしまうかもしれません。しかし、学術雑誌を除けば銀行や病院の待合室に置いてあるものと、大きな違いはありません。例えば、「アサヒグラフ」、「マイニチグラフ」、「週刊朝日」、「サンデー毎日」…、といった具合で、手持ちの空き時間で読んでしまえるものばかりです。その他に、手元に置いてじっくり読みたい雑誌も配架しています。まず、タイトルを見ただけで一目瞭然のスポーツ雑誌は、「テニスマガジン」、「ゴルフダイジェスト」、「Skier」、「SKI Journal」。自称カーマニア必読の「Car Graphic」、「Moter Fan」、「オートバイ」。コンピュータに興味のある方、または、これから始めようとしている方、さらに、ファミコンに熱中している方の「マイコン」、「マイコンBASIC」、「ASCII」、「Computer Today」。レジャーに「旅」、「旅行読売」、「L・マガジン」。そして、芸能専門誌の「キネマ旬報」、「ミュージック・マガジン」、ちょっと毛色が変わったところでは「SFマガジン」というように、特に利用度の高いものを抜粋してみました。

配架場所は、3階メインカウンター右側の雑誌書架（一部カウンター内）に配架しています。この他にも、多種多様の雑誌を所蔵しています。一度、気の向くままに読みたい雑誌を手にとってみてください。

<おねがい>

利用が終わった雑誌は、一般図書と同様に、必ず元の場所へ返してください。今回紹介した雑誌は、図書館でいずれも利用の高いものです。他の利用者の迷惑になるようなことは、しないで下さい。特に“切り取り”は『厳禁』ですゾ！

編集後記

●今年度から、8代目図書館長に川島先生（工大土木工学科）を迎えることになりました。前館長の杉浦先生、5期10年に渡る長期間、ありがとうございました。館員一同、心からお礼申し上げます。

●『テキサス大学オースチン校図書館見聞録』。小山先生の研究室では、今回掲載した内容以外に、テキサスでの先生のご体験をいろいろ楽しく拝聴させていただきました。全部紹介出来ないのが残念です。雄大なアメリカとは対象的な日本。文化的な背景の違いが、図書館や大学の在り方の違いにまで及んでいます。大変参考になりました。

●『淀川ぶらり散策』は「毛馬」をテーマに、知らない大阪を探ってみました。陽が照っているからと写真撮影に出かけてみると、あいにくの曇り空。

●『雑誌』。いろいろありますネエ。情報の洪水に巻き込まれないよう、適当に読んでみて下さい。そして、学生生活をエンジョイしてもらえたら、と思います。